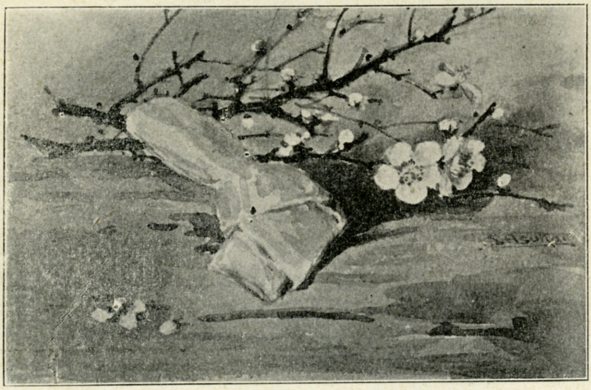
ふと、いつも破産して、手を拍つて笑ふ、また寄進者者があつて初めるといふ騒であつた。

吉野に於ける物は物として櫻の香のないものはない。茶と共に持つて來る紅白の菓子は形が櫻の花である。軒に下げてある提灯にも櫻が描いてある。店頭には茶にする爲の櫻の花の漬けたのを賣て居る。茶屋や寺院には旅人の爲めに土地の地圖がある。大きな紙へ粗い色刷にして地圖やら繪やら分らぬもので櫻の木は紅で描いてある。櫻はたゞ美麗しさを見るに止つて、實を採る爲でない。日本の古諺にも「花は櫻に人は武士」といふのがある。兎に角祭日其の他に郊外を散策し、名所古跡を訪れ、四季折々の花を見るといふのは、眞の文明の風俗の高流に位することを示すもので、これが單に風俗としても、これを創造し、固守するといふのは實に奥床しい事である。

吉野の村道は小立を廻て、數多の寺院や、小屋を通り越して、**オーミネ山**へ登る石の高い山道になるのである。森への道はこの地方の人々が絶えず通行して居る。自分が路傍に寫生をして居ると、老若男女が木や炭を背負ふて來る。家の前には木が並べて干してあるが、日本の霧深い處で何うして、乾くか分らぬのである。で景色も霧のない事は殆ど稀で宛も日本畫を見るの感がある。廣い白い野山があつて其の頂や松の木の綠が互々に明確な線で顯はれて居る。



梅一等　飛鳥井信

（楷梯の一節）

花

花の單一にして形の大なるものを求め、先づ其花より先に著色し、次に幹、葉等に移り順次他に及ぼすべし花は往々僅かの時間に色も形も變ずるとある故、最初に畫くことは必要なり。

花を主として畫く場合には、後景に多大の注意を要す。後景明るき時は白き花、黄なる花は遠近を示し難かるべし。色に於てもよく補色の應用をなし、主なる花の色を奪ひ、又は害せぬやうにせざるべからず、且花の繪は往々艶美に流れ浮華に陷り易ければ、畫面によく落つくやうに色の使用を慎むこと肝要なり（水彩畫